説教要旨『古いのに新しい』

列王記上　１７章１～２４節

預言者エリヤは、古代北イスラエルの王アハブに対し、厳しい神の裁きを伝えています。「イスラエルの神、主は生きておられる」（1 節）ことを分かってもらうためです。しかし、アハブ王は見えない神を役に立たないものとして捨て置き、聴く耳を持ちません。結局、エリヤはアハブ王の迫害の手から逃れるために、その場を立ち去ることになるのでした。そんなエリヤをめぐって３つの出来事が示されています。どの出来事もみな、「あとは死ぬのを待つばかりです」（12 節）と言わざるを得ない、絶体絶命の死の淵に立たされていく人間の現実が言い表されています。しかしその絶体絶命は、神の奇想天外とも言える救いのみ業に出会っていくための通過点に過ぎなかったことを、本日の箇所が示しています。

ふと、安積力也さん（独立学園元校長）の言われる『辺境』という言葉を思い出しました。それは開拓地と未開拓地の境目を言い表す言葉ですが、安積さんにとっては、人間の嘘や限界が否応なく露呈する場所であり、同時に、その限界を超えた向こう側、知られざる真実の世界に一番近い魅力的な場所として映ります。人間の意志や努力の限界を超えた、見えないけれども確かな力によって導き出される地点を、安積さんは『辺境』と呼びます。その具体的な出来事として、落雪事故によって瀕死の状態に陥る友人の姿を目の当たりにした、ある高校生の証を紹介されています。「ある時、どうしても逃げることも、ごまかすことも、忘れることもできない出来事がありました。『ああ、こいつ本当に死んでしまう！』…あの時僕は何をすればいいのか分からず、気がついたら手を合わせて祈っていました。あの時の感覚は今でもはっきり覚えています。僕の中の不安恐怖が和らぎ、勇気と希望に変わる、ものすごい力を感じました。…もしもあれが、僕の中での最初で最後の出来事だったとしても、今僕ははっきり言える。この世には、人間の想像を超えた、とても大きな何かが存在するということを」。

死の淵に立たされたエリヤをめぐる３つの出来事。それは、逃げることも、ごまかすこともできない死の現実、自分の弱さや限界が露呈する辺境の地に立たされた人々の物語です。しかし、そのなかで不思議と、命養われ、新しく生まれ変わっていく喜びに与っていった人々の物語です。単なる古いおとぎ話なのではありません。これからも永遠に、人は神が創り出す全く新しい現実に出会えるのだということを生き生きと私達に証明し続けてくれるはずです。「神などいない。役に立たない！」、そう叫びつつ、抗えない現実に怯えていたであろうアハブ王に、エリヤは告げます。「主は生きておられる！」。

（文責：望月達朗牧師）